

## 海と陸の放浪者——

### 『キャプテン・シングルトン』

ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『キャプテン・シングルトン』(Captain Singleton, 1720) は、出版の年代において『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719) と『モル・フランダーズ』(Moll Flanders, 1722) との間に挟まれているが、作品の性格においても、この両者の中間に位置する趣がある。以下、この二作と『シングルトン』との共通点、相違点、そして『クルーソー』からこの作品を経て『モル』へと移行していく過程などに注目しつつ、『シングルトン』の特徴について考察してみたい。

### 宮崎 孝 一

#### 一 変貌

シングルトンは良家の生まれだったらしいのだが、二歳ぐらいのとき乳母に連れられてロンドン南部のイズリントン (Islington) あたりの野原で遊んでいて、乞食の女に誘拐され、次にジプシーの女の手に渡り、このジプシーが絞首刑になった後は、教区の世話によって育てられることになり、幾つかの町を転々とする。十二歳ぐらいのとき、海辺の町で会った船長に可愛がられるようになり、彼の船に乗りこむ。各地での貿易を終えて船がリスボンに着いたと

き、船長が死に、彼は船から下ろされるが、老パイロットの世話でポルトガル船に乗り、地中海から更に東インド方面で貿易に従うが、ポルトガルへの帰路喜望峰で嵐に会い、マダガスカル島に漂着する。改めて乗せてもらう船を見つめるための種々の試みに失敗した後、アフリカ本土を陸路横断して西海岸に出ることになり、二十七人の総勢で、猛獣、蛮人の襲撃など多くの危険、冒険に会いながら、一六八六年に西海岸に達し、さらに一人でイギリスに渡る。

シングルTONはアフリカ横断中に他の仲間同様、莫大な黄金と象牙を手に入れていたので、イギリスで安楽な生活を送れたはずだったのだが、二年足らずで財産を蕩尽する。ここまでが物語の前半で、彼はやがてまた船に乗り込み、間もなく海賊になり、西インドから東洋まで荒らし回る。しかし、最後は悔悛し、イギリスで結婚し一応落ち着くことになっている。

以上がごく大ざっぱなこの物語の梗概である。シングルTON（周囲の者からボブと呼ばれている）は少年時代自分に親切にしてくれる船長に愛着を感じるが、船長は彼が余りに親近感を示すことは好まない。

私は船長を「お父さん」と呼ぼうとしたが、彼はそれを許さなかった。わしには本当の息子たちがいるからということだった（三頁）。

こうして、ボブは外面的境遇のみならず精神的にも天涯孤独である。

リスボンで船を降りて、行く先もなく、茫然としている彼と、老パイロットとの間には次のような会話がある。

老パイロットは、私が途方にくれているのを見て近づいて来て、ブローケン・イングリッシュで話しかけた。

「お前、もう行かなくちゃ」

「何所へ行けっていうんですか」と私は言った。

「何所へでもだ。なんなら、お前の故郷へ帰ったら？」

「なんで故郷へ帰らなくちゃならないんですか」

「お前、身よりはないのか」

「ありません、世界中どこにも。あの犬だけです」と言つて、私は船で飼っていた犬を指さした。この犬

は、さつき肉切れを盗んで来て、それを私の傍に置いた。たので、私はそれを取り上げて食ったところだった。実際、この犬だけが私の親友で、私の食う物の心配もしてくれていたのだ（四頁）。

少年時代のボブのこのような境遇は、中産階級の子弟であつたロビンソンのそれに比べて遙かに惨めである。また、若い時のモルは出生はボブに似ているが、孤独の思いはしないですんだ。可愛らしい、長じて後は美しくなった容姿の故に、多くの男女が、本心はどうだったにせよ、彼女に関心や愛情を示してくれたからである。しかし、女ざかりを過ぎたモルが貧窮に追われて泥棒稼業に陥るのに比し、ボブが海賊になる過程は、あり余るほどの財産を自分の無思慮で使い果たしたことによるのであつて、二人の經歷の異なる点である。

さて、犬から食料を恵まれるような、動物以下の存在とも言えそうなボブは、無知なるが故に恐れを知らない。マダガスカル沖で船員たちの間に反乱が起こり、ボブもその一味として陸に降ろされ死刑を宣告されるが、彼は自分が直面しているものの重大さが分からない。

首謀者二人は即刻絞首刑になり、私も他の連中と一緒に同じ運命を待つ身だったが、そのことについて何か思い悩んだという記憶はない。ただ、大声をあげて泣いただけだった。当時の私は、この世についてもほとんど知らなかったし、あの世については全然何も知らなかったのだ（一〇頁）。

島に残された三十人近くの船員たちは三隻の舟に乗って島を離れてどこかへ行こうとするが、はつきりした当てはない。

我々は、自然が造り得る最も惨めな人間たちだった。航海には出たが、航海しているとは言えなかった。何所かへ行くはずだったが、何所という目的はなかった。自分たちのしたいことは分かっていたが、實際何をしているのかは分からなかった（三二頁）。

このような行方定めぬ危なっかしい航海の末、彼らはアフリカ大陸の一端にたどりつく。

さて、この地を出発点として、陸路アフリカを横断しようとする仲間たちが謀るときも、ボブは甚だ無関心である。

私はそのことでは何も心配しなかった。どこかの土地に着ける見当さえつけば、どこでも、どんな所でも構わなかった。自分の前途に何が待っているかと、自分の身に何が起こるか、あるいは何が起こらないかなどは考えてもみなかった。私の年齢では誰でもそんなものだろうが、みんなの言うことには、どんなに危険なことでも、どんなに成功のおぼつかないことでも、すべて私は賛成した（四四頁）。

このように、ノンシャランとも呼ぶべきボブが突如、責任ある地位に就くようになるのは、アフリカ横断の途中においてである。白人たちと土民との間に軋轢が起り、多くの土人部落から戦闘のために武装した戦士たちが集まって来たのを、白人が射殺した時のことである。

この時以来、私は自分の置かれている状況を、前より真剣に考えるようになり、自分たちの問題の処理に頭

を使うようになった。仲間は皆、私より年上だったが、何の才覚もなく、何事かを実行する段になると平静さを失ってしまう連中だったからである（五四頁）。

この戦闘の時から彼は皆から「キャプテン・ボブ」と呼ばれるようになり、俄かにこの集団の指導者の地位に立ち、横断旅行中、事あるごとに彼が指図を与えることになる。しかし、ボブのこの変身ぶり、あるいは出世ぶりは余りに唐突であり、必然性を欠く嫌いがある。この時までの彼は全く誰からも顧みられない目立たない若者だったのである。

物語の後半で、ボブが海賊の仲間（後には首領）になるのも、悪人ハリス（Harris）の誘いがあったとは言え、抵抗がなさ過ぎる。そして無慈悲な略奪や殺人を重ねた後、海賊稼業から足を洗う気持になり、商人になりすまして巧みに商売することも安易すぎる。これらの変身は、精神の内面と関連のない仮装の趣があり、彼のアイデンティティーは那邊にあるのか、ついに、はつきりしない。冒険とサスペンスの物語は、次々と目先が変わって面白ければよいのだと言え、それまでであるが。ともかく後にドイ

ツやイギリスの小説で發達するようになるビルドゥングスロマンとは程遠い観がある。

一例としてボブの信仰心について見てみよう。前作ロビンソンの信仰告白と、実際の行動との間には乖離が見られ、また、モルの晩年における改悔も便宜的な感じがあるが、ボブにおいてはどうだったであろうか。

海上において激しい暴風雨に会い、生死の関頭に立つて、それまでの自分の罪の生活について神の許しを乞う人物は、デフォアの作品（例えば『ロクサーナ』）のみならず、当時の多くの物語に見られるところであるが、シングルトンもこの種の危機に遭遇する。ニュー・ギニア付近の海上で未だかつて経験しなかったほどの激しい大暴風と雷鳴と雷光に見舞われ、一同海底の藻屑となることを覚悟するが、この時のシングルトンは次のような反応を示す。

私の魂は驚愕狼狽の極地に達した。正当な罰を受けて奈落の底に沈むものと覚悟した。しかし、真の改悔によつて心が改まり和らぐということはなかった。罰は脅威だったが、自分の罪に戦きはしなかった。神の報復は恐ろしかったが、自分の罪のおぞましさは感じな

かった。罰はこの上なく恐ろしかったが、罪を犯し続けたという気持は今までと同じだった（一九五頁）。

このように自分の悪業に関して無反省だったシングルトンが、罪を悔いる気持になるのは、仲間のウィリアム・ウォルターズ（William Walters）の説得によることになっている。クエーカー教徒である医師ウォルターズについては後に詳しく考えることにするが、ともかくシングルトンはウォルターズの影響によつて自分の略奪の行為を悔い、また、その行為の所産である富に対しても感じ方が変わってくる。

今や莫大な額に達していた自分の富も、足もとの塵あぐたと同然のものと思われた。それに対して何の価値も認められず、それを持つていても心の平和は得られず、それを失うことも大して気にはならなかった（二六五頁）。

思いつめたシングルトンは自殺を決心するが、それは神に許される道ではないとウィリアムに止められる。しか

し、略奪の結果である富を持ち続けているのは、盗賊であり続けることに外ならないとの思いから慈善的に寄付することも考えるが、そういうことをして自分たちの前身がばれる危険を思うと、それもできない。また、財産を相手構わずにばらまいてしまえば、気は楽になるが、奪ったものを正当の所有者に返してやるのができなくなるといふのがシングルトンの悩みである。この問題に対してウォルターズは、神の摂理で、正当の所有者に会うことができるまで財産は持つていようと答える。これは一見妥当な忠告のようであるが、いつになれば正当の所有者が現れるという保証があるわけでもなく、事実シングルトンはこの物語の中で、そういう相手には会わず、贖罪の行為はついに果していない。ウォルターズの言ったことは、ほんの気休めの妥協的彌縫策に過ぎないと言えよう。そして、シングルトンの悔悟も、実行を伴わない点で不徹底の誇りを免れない。物語の結末が道德的志向で終わることを好む読者へのリップ・サーヴィスと言えよう。

## 二 価値観の顛倒

シングルトンの一行は、アフリカ旅行中、食料、水等を調達するため土人たちと取り引きするが、この場合、自分たちの持っている貨幣は何の価値も發揮しないことを知る。これに反して貨幣を材料にして作ったちゃんな装身具を土人たちは非常に珍重するのである。

一行の中に刃物職人がいて、三、四枚のエイト銀貨（スベインのピエストル貨のこと）を薄く延ばして小さく切り、様々な鳥や獣の形にして、それをつないで腕輪や首輪にする。それ以外にも彼は多くの装身具を作るが、これが土人との交易で大変な偉力を發揮することになる。

鳥の形に切りぬいた銀の薄片と引き換えに我々は二頭の牝牛を受け取った。また、鎖状の腕輪一つで、イギリスならたつぷり十五、六ポンドはすると思われる様々な食糧をもらった。こんなわけで、貨幣のままならば六ペンスの値打もないような金属が、玩具や小間物の形になると、優に百倍の価値になり、欲しいもの

は何でも手に入った(二八頁)。

このような取り引きの次第を語ってシングルトンは「我々は、哀れな土人たちの愚かさに驚いてしまった」(二八頁)と言っているが、作者デフォーは、このエピソードによって、白人社会の貨幣の価値に対する盲信を批判しているのかもしれない。金貨や銀貨、いわんや紙幣は絶対的価値があるわけではなく、人々が便宜上それらの価値を認める取り決めによって与えられているものに過ぎない。白人が貨幣を喜ぶのも、土人が安ビカ物の装身具を喜ぶのと、本質的な差があるわけではないのである。

『ロビンソン・クルーソー』において、無人島に漂着したクルーソーが、一応落ち着いてから、物資を運ぶために自分の乗っていた難破船を毎日のように訪れ、何回目かに船室の戸棚の抽斗に三十六ポンドほどの硬貨を発見したときの彼の感慨はこの関連において面白い。

この金を見て私はおもわず微笑した。「この店たなざらし者よ。一体お前は何の役に立つというのだ。私にとってはいささかの値打もない。手に取る価値さえあ

りはしない。全部合わせたところでナイフ一挺ほどの値打しかないものだ。お前には用がない。そのまま眠っているがいい。救ってもらうに値しない奴として海の底に沈めばいいのだ」(五七頁)。

貨幣は、人間社会の契約によって初めて価値を帯びるものであることを、このエピソードは具体的に語っている。

アフリカ横断が終りに近づいた頃、シングルトンの一行は、土人の部落で原住民と一緒に生活している一人のイギリス人に会う。彼の住んでいる辺りは豊かな金鉱があり、河にも沢山の砂金が流れているが、彼はそれらに何の興味も示さない。彼は次のように語る。

「この土地に来て以来、その気になって集めれば、百ポンドぐらいの重さの黄金を手に入れることができたでしょう。しかし、それを何の役に立てようという当てもないし、自分の置かれている惨めな環境から脱け出そうという望みも、とうの昔に捨ててしまったから、金のことは全然考えなくなりました。たとえ砂金が一トンもあって、その中にころげ回るような身に

なつたところで、この土地では何の取り柄になるでしょう？ 金の山が、一瞬の幸せでも与えてくれるわけではなく、今の苦勞をちよつとも軽くしてくれるわけでもないのです。お分かりになるように、黄金があつたところで、身にまとう衣服が買えるものでもなく、病氣を治すための酒一滴でも手に入るわけではないのです」(二二六―七頁)。

この挿話もまた、貨幣制度の支配しない社会での、黄金の無力さを語っている。この作品を読む読者が、富の獲得に狂奔するイギリス資本主義社会の中産階級から成り立っていたが故に、これらのエピソードは、彼らにとって一服の清涼剤の役を果たし、一瞬、夢の国に遊ばせる効果も持ったのであろう。

これに反し、モルやロクサーナが自分の容色と才覚を十二分に活用して富を殖やし、生活を向上させようと図る努力は、金銭が万能である社会において初めて効果を發揮するわけである。そして、彼女たちの、なりふりかまわぬ奮闘ぶりは、人々の富への渴望を代行するものとして読者の共感を買ったのであろう。

### 三 分身としてのウィリアム

シングルトンの仲間として海賊船に乗りこんでいるウィリアム・ウォルターズは医者であり、クエーカー教徒ということになっているが、一筋縄では行かない人物である。まず彼は海賊の仲間でありながら、自分が海賊であることを認めようとしない。

最初彼はベンシルヴァニアのスループ船に乗っていたのを捕えられて海賊船に移されたのだが、彼はこのとき、自分のは後ろ手に縛られて無理矢理にこの船に運ばれて来たのだという証明書をシングルトンに書いてもらい、今まで乗っていたスループ船の船長にそれにサインしてもらったのであった。彼がこのような要求をしたのには深謀遠慮があった。

ウィリアムは、次の点で我々より有利な立場に立っていたのだ。我々は捕まれば海賊として絞首刑になることは必定だったが、彼は許されることは明らかだった。彼はそれを、ちゃんと計算に入れていたのだ(一



四四頁。

この後の彼は海賊船上において、付かず離れずの立場を持ち、そのことがこの物語を単なる活劇的海賊物語よりも興行きの深いものにするのに役立っている。シングルトンもまた、海賊船上において、仲間の海賊たちの考え方や行動に必ずしも同調せず、殊にポルトガル人の場当たり的なやり口に批判的であるが、ウィリアムはこのようなシングルトンの面を強調した「分身」と呼んでよからう。

荒くれ者の海賊たちが、血気にはやって無謀な行為に走ろうとするとき、良識を働かせて彼らを抑えるのは常にウィリアムである。例えば彼らの船が六百人ほどの黒人ばかり乗っている船に遭遇することがある。これは奴隸として白人たちに運ばれて来た黒人たちが、反乱を起こし、白人全部を海に投げ込んでしまったのであった。白人の一人が黒人の女を凌辱したのが原因であった。しかも、黒人たちは白人を失った今、船を動かす術を知らない。シングルトンの仲間の海賊たちは、黒人をすべて殺してしまおうとするが、ウィリアムはそれを押し留める。彼は次のように言う。

「我々だって、この黒人たちの立場に置かれたら、できることなら、同じことをしたことだろう。黒人たちが、承諾もしないのに奴隸として売られたのは最高の不当な扱いを受けたのであって、黒人たちのやったことは自然の法則に従ったまでだ。あの連中を殺すなど以外の外だ。許し難い殺人行為になる」(二五七頁)。

こうして黒人たちの命は助けるが、彼らの船をいつまでも曳航し続けることはできない。そこで、ウィリアムが船長ということになって部下と共に、ブラジル海岸でひそかに黒人たちを奴隸として農場主に売りつける。ウィリアムのこの行為は、先程見た黒人の人権に関する彼の主張とは相反している。

その他の場合にも、ウィリアムは、理想論は述べても行動は現実的であることが多い。例えば、正体のはっきりしない中国人と取り引きするとき仲間たちは危惧の念を持つが、ウィリアムは次のように言う。

「その方が得だからというので私に対して正当な態度を取る人間は、信条として正当な態度を取る人間と同

程度に信頼できると思う」(一九九頁)。

ウィリアムにとっては、相手の行為がたとえ打算に発するものであらうとも、一貫した根拠があれば、信用するに足るのである。

また、セイロンの南岸で、ウィリアムの仲間が土人の女をからかったことから、土人の男たちが怒り十七人の白人を負傷させたとき、多くの者たちは五百人の土人に対する復讐を主張するが、ウィリアムはそれに反対である。彼は言う。

「……復讐したとして何の得になるだろう。たとえそれで気が済んだところでつまらないことだ。お前たちの目的は金だろう。この哀れな土人たちを二千人か三千人も殺したところで、あの連中は一文なしだ。あの哀れな裸の連中から取れるものは何もありません。かえってこちらが十何人か命を落とすぐらいが関の山だ」(二一九頁)。

ウィリアムがシングルトンに海賊稼業から足を洗うよう

に勧めるときも、彼一流の説得法を用いる。

「……お前さんは十分な金が入ったからには、今の稼業を止める気にはならんかね。人は大体、満足できるだけの金がたまれば商売は止めるものだ。商売が面白くて商売をするなんて奴はありやしない。いわんや盗みそのものが目的で盗みを続けるなんて者はあるものじゃない」

ウィリアムにとっては、海賊を働くことも商売の一変形に過ぎず、富獲得の手段に外ならない。彼はクエーカー教徒ということになっているが、自分と仲間たちの所業を、どれだけ精神や信仰に関わる問題として考えているか、甚だ疑問である。

むしろ、ウィリアムは、そしてシングルトンは、己が罪業を悔いてというよりも、海賊という絞首台に直結している危険な稼業から離れたいという願いから、船を降りて商人になりましたのであつたらう。二人はアルメニア人の堅気な商人ということにしてヴェニスに留まり、海賊として得たすべての品物を金に換えるが、ウィリアムは生国イ

ギリスのことも気にかけるようになる。いかなる放浪者に

も潜んでいる故郷への想いに誘われたのであろうか。そし

て、元来故郷を持たないはずのシングルトンさえウィリア

ムに共感する様子を示す。ウィリアムには叔父と妹があ

り、彼は二人に手紙を書く。叔父も喜ぶが、妹は特に喜ん

で優しい返事をよこすので、ウィリアムは妹に何度かに分

けて金を送る。彼女が信頼できそうな女性に思われるの

で、シングルトンも金を送り、二人が彼女に送った金は合

わせて五千ポンドに達する。彼女はその金でロンドン近郊

に家を買ひ、結局シングルトンは彼女と結婚して、そこに

住むことになる。半生を放浪に過ごしたシングルトンもよ

うやくある程度の落ち着き場所を得たわけであるが、此所

もまた彼にとってついすみかではあるまいという気がす

るのは、この結婚が金銭によって購われた元来打算に基づ

くものであることにもよるし、また、もの心ついて以来、

安定した生活というものを味わったことのない彼が、一カ

所に永く留まることができるであろうかという疑念を我々

は抑えることができないからである。そこにはまた、作者

デフォアの波瀾万丈とも呼ぶべき生涯の投影が見られるの

かもしれない。

【注】

頁数は Oxford English Novels 版による。